第 12 回 ISSP 柏賞を受賞して

極限コヒーレント光科学研究センター軌道放射物性研究施設　　原沢 あゆみ

第 12 回 ISSP 柏賞を福島さんと共に頂くことができましたこと感謝いたします。授賞式でも申し上げたのですが、つくば分室は四半世紀以上の長い間、物性研究所そして東京大学内外の全国・世界の方々が建設、開発、維持運営に関わって支えてくださり、そして終了するところまで共に歩んでくださいました。いただいた柏賞は、これまでつくば分室を守り支えてくださった方たち全ての方へお授けくださったものと思っております。

軌道放射物性研究施設では、1975 年より東京都田無市に放射光光源専用の加速器と光物性実験設備を建設して、全国に放射光の共同利用実験を提供してきました。1987 年からは新しい加速器の建設を視野に入れて、高エネルギー加速器研究所の放射光実験施設（KEK-PF）に挿入光源とビームライン 2 本 3 ステーションを建設し、軌道放射物性研究施設つくば分室が立ち上がりました。KEK-PF では、固体および表面界面を対象に、真空紫外と軟 X 線領域の光電子分光、スピン分解光電子分光、光電子回折、発光分光などを手法とした物性研究と装置の開発を、共同利用実験者や協力してくださる方々と一緒に行っていました。田無とつくばで放射光を利用した研究を続けていましたが、1997 年には田無の放射光施設 SOR-RING が終了しました。2005 年には、何度も計画の変更を余儀なくされながら長い間積み重ねてきた極紫外・軟 X 線領域の新しい高輝度放射光光源施設の建設計画は、残念ながら断念することになりましたが、2007 年からは兵庫県播磨 SPring-8 に偏光制御可能なアンジュレーターとビームラインそして測定装置の建設を行いました。一方でつくば分室は役割を終えて、2014 年 3 月で共同利用を終了し 9 月で撤退終了、2015 年 3 月にはオフィスとして使用してきたコンテナハウスが撤去され、東日本大震災 4 年目の日にはすっかり更地になっていました。つくば分室の最初から最後まで、大きな力や地道な現場の力として支えてくださった全ての方に感謝申し上げます。

私自身は、つくば分室のほぼ立ち上げ時期の 1989 年（平成元年）に物性研究所軌道放射物性研究施設に職を得て、最初から高エネルギー加速器研究所放射光実験施設内にあるつくば分室で、ビームラインや測定装置の建設に携わりました。今回このような機会を与えられ、つくば分室で過ごした 25 年を振り返ると、非常に密度の濃い日々であったことが思い起こされます。様々な工具の使い方を学ぶところから始まり、ビームラインやアンジュレーター、電子分光の各種の実験装置の建設・保守、ユーザー実験対応で、加速器などの大型機器から細かい試料、機械・電気のハードウェアからソフトウエア、それから人と自分自身の心の動きと日々格闘していました。壊してしまった物も数々ありますが、「全国津々浦々に噂は広まっているからね。」と言われながらも、必ず助けてくださる方達がいました。トラブルが起きた時のことほど心に残っているものですが、それぞれの力を持った担当の方達が、力を尽くして確実にトラブルの対処を行っていく様子を目の当たりにさせていただいていました。それなりに“しんどい”思いをしたのですが、それを超えられた時の安堵感と感謝の気持ちの方が大きかったことを思い出します。そして、その最も大きかったことが、東日本大震災であったかと思います。

私はつくば分室のほぼ始まりから終了までの一つの有機的な営みに関わらせていただくことができました。私自身がこの中で育てられ、共に過ごし、この営みを閉じることができたことに感慨深い思いでいます。このような本当に有り難い経験をさせていただけたことに深く感謝しています。

柏キャンパスに勤務するようになり、1 年近くになりました。初めての電車通勤をするようになり、柏の葉キャンパス駅からキャンパスまで様々の種類の木々の下を自転車で往復する生活に慣れてきて、柏キャンパスの方たちの動きを少しずつ知るようになりました。極限コヒーレント光科学研究センターE 棟に建設した超低速電子回折型電子スピン検出器に関わり、また物性研学生教職員相談室相談員としての任務など、新しいつながりの中にいることもまたありがたく思います。この役割をどう果たしていけるか、今までいただいてきたことを、どう活かし新たにし、お返しするかと、戸惑いながらではありますが、挑戦したり振り返ったりの日々です。柏キャンパスもつくば分室と同じように、キジの鳴き声が聞こえてきます。この自然とキャンパスの音や声に耳を傾けて聴き、心に響かせ、そして丁寧に応えていきたいと思っています。